

第13回河川生態学術研究会 研究発表会開催報告

河川・海岸グループ 研究員 伊藤 将文

平成22年11月10日（水）に発明会館ホール（東京都港区）において、第13回河川生態学術研究会研究発表会を開催しました。

13回目となる今回の発表会は、応用生態工学会に後援と参加を頂くとともに、研究会の関係者以外にも積極的に参加を呼びかけた発表会として開催しました。プログラムは、「ポスター発表」、「口頭発表」、「総合討論」の3部で構成し、日本全国より120名以上の研究者、行政関係者、建設コンサルタント等が参加し、活発な意見交換が行われました。

河川生態学術研究会は河川生態系に焦点を当て、その構造と機能、さらにそれらを支えている自然のシナリオを明らかにするとともに、その研究成果や知見を新たな河川管理へ役立てることを目指して発足しました。

現在、河川生態学術研究会では、「標津川」、「岩木川」、「千曲川」、「多摩川」、「五ヶ瀬川」水系の河川研究グループに、各研究グループの研究成果を横断的にまとめ、整理評価するとともに、他河川への適用や知見の一般化を目指して設置された「総合研究グループ」を加えた6つのグループが活動しています。本発表会は標津川研究グループを除く5つのグループから成果報告がなされました。



河川生態学術研究会実施体制

○ポスター発表

ポスターセッションでは、岩木川、千曲川、五ヶ瀬川水系および多摩川の4つグループより10の発表が行われました。この中でも九州大学大学院の鬼倉徳雄助教による『北川の魚類相が豊かな訳—河口域のハゼ類を指標とした北川・五ヶ瀬川・大瀬川の比較・検討—』が、沿岸の海生動物を基盤とした河口の動物相の中でハゼ類に着目した着眼点の良さ、多くの河川と比較し五ヶ瀬川の特徴を明確にしている点等が高く評価され、「ベストポスター賞」が贈られ

ました。

○口頭発表

口頭発表では、5つのグループ及び「その他河川の事例報告」を合わせて14の発表が行われました。

口頭発表題目

| | |
|---|--------------------------|
| 岩木川研究グループ | |
| ●岩木川研究の概要報告 | 佐々木幹夫(八戸工業大学 教授) |
| ●岩木川下流葦原に生息するオオセッカの現在 | 東 信行(弘前大学 准教授) |
| ●集水域からみた岩木川の生態系機能:炭素輸送量とその起源 | 占部 城太郎(東北大学 教授) |
| 五ヶ瀬川水系研究グループ | |
| ●五ヶ瀬川水系研究の概要報告 | 岩本 俊孝(宮崎大学 教授) |
| ●河川生態系変動予測モデル”を用いた実務用ツール構築に向けた取り組み | 服部 敦(国土技術政策総合研究所 河川研究室長) |
| ●五ヶ瀬川の魚類に関する安定同位体分析とハゼ類のDNAデータベース作成について | 小池 裕子(九州大学総合研究博物館 協同研究員) |
| 多摩川研究グループ | |
| ●多摩川研究の概要報告 | 星野 義延(東京農工大学 教授) |
| ●礫河原造成地の植生遷移と出水の及ぼす影響 | 島瀬 頼子((財)自然環境研究センター) |
| ●多摩川中流域の河道形成機構とハリエンジュの動態 -堰と土丹の影響に着目して- | 福島 雅紀(独立行政法人土木研究所) |
| 千曲川研究グループ | |
| ●千曲川研究の概要報告 | 中村 浩志(信州大学 教授) |
| ●千曲川中流域における基礎生産—測定手法の検討— | 戸田 任重(信州大学 教授) |
| ●千曲川中流域における飛翔昆虫の動態 | 平林 公男(信州大学 教授) |
| 河川総合研究グループ | |
| ●河川総合研究の報告 | 島谷 幸宏(九州大学 教授) |
| その他河川の事例報告 | |
| ●自然共生研究センターからの報告 | 萱場 祐一(自然共生研究センター 上席研究員) |

○総合討論

総合討論においては、口頭発表、ポスター発表を踏まえ、10年以上の長期間の研究の蓄積による研究成果の重要性について、研究者や行政関係者等の視点から挙げられた意見を元に議論が展開されました。

近年、国土保全の立場から、自然再生・都市再生は川づくりの重要な課題となってきている一方で、河川関係の予算にも厳しい制約が課せられています。その様な状況において、河川生態学術研究会の成果である研究データの重要性や複数河川の横断的な比較検討から得られる知見の重要性が再認識されました。また、長期間の研究成果を有効活用し、さらに継続するには、既往の研究成果や関連する調査成果を蓄積し活用する仕組みをどう構築するかなど、重要な議論がなされました。

発表会を通じて、様々な立場の関係者が河川生態系に関する最新の研究成果を共有し、その重要性、必要性について再認識する場を提供したことは、今後の研究の継続とその成果の河川環境管理への活用に向けた成果となったと考えています。